
屈折ノ蓋 （旧タイトル：歪んだ舌）

時果行夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屈折ノ蓋（旧タイトル：歪んだ舌）

【Nコード】

N7832X

【作者名】

時果行夜

【あらすじ】

マスタアドのボーカル・ユガを神のように敬う、弟のシズク。ユガの快楽は凶器となり、シズクの皮膚の奥に痛みを与え黒い染みを残していく。歪んだ愛の狂気の甘味は、ユガの舌に絡み付き、その先に蓄積されてく。

syrup（シズクの味覚編）からはじまる、マスタアドを核にしたモノガタリ。

それぞれの味覚はどんな味がするの？

『こんなクソみてえな世の中に生まれ落ちたことを、誰に感謝してやろうか』

ユガの底に潜んでいるもの。ただの悪戯に過ぎないと、甘く見落としていた。

ユガの狂気は、俺と同じ血のどこに巣くっているのか。

ユガの母親か？ 俺とユガは母親が違う。

初めて会ったとき、ユガは笑った。唇の片方が上がる笑いで。

今と変わらない。強がっているわけでもなく、ユガはユガとして完成されていた。

神のようにも見えだし、亡者のようにも見えた。

俺にはユガしかいなかったし、ユガには俺しかいなかった。

それは、愛情よりも超越したものだといっても過言ではないだろう。

俺たちは拠点を変え、俺たちのバンド『マスターアド』を再始動させていた。

ユガはイラストレーター、俺はユガのデザインした物を形にする仕事を手掛けている。

マスターアドのユガは崇拜される位置にいて、教祖のように君臨しウタを歌う。

メジャーへのオファーがきてもすべて断っていた。

ユガはとにかく拘束されるのを嫌う。言い換えれば支配者でありたいのだ。

一度だってユガが弱みを見せたことなどない。いつも癖のある笑い方で君臨し続ける。
だが。

最近のユガは。

「シズク、マスタアドやめねえか？」

いきなり、だ。

「何を言っているの？」

「歌いたくねえんだよ」

黙っていると歌いだした。

「支離滅裂／順番通りに行儀良く破壊しろ

支離滅裂／なだめるように優しく犯せ

誰にも命令されやしない／俺の言葉をもって崇め」

「つとに支離滅裂だよ」

それは、ユガが作った「支離滅裂」というウタで、インディーズでは上位にランクインした。

「なあ聞いてんの？」

「聞いているよ。ウタを」

「ウタ……か。俺のウタに意味はあるのか？ 俺に意味はあるのか？」

「あるよ」

そう言ったらユガは黙った。それ以上を聞くのを止めたのか。

ユガの意味？

俺はユガの言葉に戸惑いもした。

あの一件以来、ユガは変わった。

ここにくる前、別な場所で店を構えていた。

ひとりのアルバイトの女がいたが、ユガはその女に手を出した。初めてのことだ。

それまでのユガは、俺にしか興味がなかったのだから。

目覚め、なのかもしれない。異性への。
ユガは俺を壊すことはやめなかったが、それでも上の空のように思
う。

“ユガはドコカで別ノ女を壊シテル”

ユガには、匂いを嗅ぎ分ける能力が備わっているように思う。
人に棲む狂気という匂いを。
水飴みたいな、かつたるいもんだとユガは言う。

俺にはもう、ユガを止めることができなかつた。次第にユガが俺から剥がれていく。俺を壊し、俺は壊れかけのまま。

それとももう。

完全に壊れちまったのか。

虚像の渦の中で俺は思う。ユガの作り上げた皮膚は憎しみの成果なのか？ 難解な綴りを俺の肌の奥まで埋め込み、インクの染みを舐め、味を確かめることなく飲み込む。その喉仏は単なる通過点。ユガの舌の味覚はとうに役割を終えている。削いだ舌では、なにも感じることはできないだろう。インクの苦味と添う俺の心も。

薄べつたい舌に絡みつきなごら、ユガの喉仏に向けて俺は言った。

「終わりにするか」

ユガの目が俺を刺す。

「仮説的なことは言うなよ」ユガは俺を押し退け「どっちをだ？

マスタをか？ 俺か？」と問う。

俺は手探りでテーブルの上のタバコを捕まえ、口端に押し込みながら答えを出した。

「マスタアドを消滅できても、俺はユガを失えない」

「わかつた。ただ」

ユガはライターを点け、俺のくわえたタバコの先端を焦がしてから奪い取った。いつもはタバコを吸わないユガが、こんなふうにはタバコを口にするのは、気分が安定してない証拠だろう。苛ついているのか？ 俺に。

ユガの指先がりモコンを掴むと同時に、エアコンが浅い音を響かせた。冷気を排出するのを確認して、用済みモコンを俺の腹の上に放る。

「ただ？」

ユガの排出する煙に聞く。

「俺とお前はなんだ？」

俺は首を傾げ、

「何を言いたいのか？」

と、再びユガ思考を請う。

「家族のそれ以上でもなく下でもなく」

「家族かよ」

俺は笑った。

「なにがおかしい」

「家族がやるかよ？」

「おまえの親父はヤっただろう。俺は餌食を横取りしたかっただけだ」

「じゃあなんであいつを殺したんだ？」

「こんなクソみてえな檻の中に作為された俺は誰を憎めばいい！？」

あいつだ。あいつが俺らを創ったんじゃないか。誰が頼んだ？

俺は産まれてきたいと願ったか？」

「……なにがあった？ らしくねえよ」

ユガは普段、感情を剥き出しにしたり、言葉を荒げたりすることをしていない。

「俺もそう思う」

そう言うと、俺の口元にタバコを戻し、部屋を出て行った。

狂気の味か？

フィルターに残された湿り気に、俺は翻弄されている。ユガが完全に俺から剥離したような気がしてならなかった。

腹に残されたりモコンのスイッチを押した。まだ梅雨もきてないってのに。不条理な天気と、ユガの纏う冷気に、タバコの先を押し付けたくなりながら俺は幻滅する。吐いた煙がエアコンの余韻に浸り、ユガが開け放したドアの向こうへと流れていった。

タバコの火種が意識を攪拌させやがる。

思い出すだけで心が軋む。

俺は親父の餌だった。泣き叫ぶ俺に連動して、初めのうちは妹のなな子も泣いていたけれど、俺もなな子も慣れというか、どうでもいいことに変わっていったんだと思う。

しばらくしてユガがやってきた。ユガの母親に男ができて、ユガの存在が邪魔だと置いて行つた。

親父と俺の行為を、ユガはまるで映画を鑑賞するように、お菓子とジュースを持って見ていた。時々その口端が薄ら笑うのを、俺は親父の腕の中から垣間見ていた。

ある日、ユガは、泥酔して寝ている親父の布団にタバコを放り投げた。火は瞬く間に燃え広がり、親父と家を包んだ。

親父のタバコの不始末ということで、事は片付いた。俺とユガは同じ養護施設、なな子は親戚の家に預けられることになった。

施設や学校でのユガは優等生だった。ただそれは真の姿ではなく、計算し尽された偽の世界であり、誰もがユガの支配下で成り立っていた。

俺もユガの支配下のひとりに過ぎない。神を愛している。神の下に跪き、この肉體ニクタイでさえも献上する。ユガの檻の中で俺は蹲り、ユガが扉を開けてくれるのを待っている。その手に、錆びた鍵を握り締めるのを。

朝になつても、扉は開かれなかった。

電話が鳴り響き、ようやく眠りかけた俺を起こした。相手は警察で、ユガを檻に入れたと言いやがる。

「フホーシンニューにフジヨボーコー」

俺は電話の穴ボコから、蛆みたいに沸いてくるデカイ声を、夢現に反復した。

「探してた。不確かな確信はここにある。どこにも見つかりっこねえ、確信はひとつだからだ」

暗号みたいな言葉を綴るユガがいた。それがマスターアドの言葉でもある。解読するたびにユガの中枢を疑う。言葉と意味とが繋がる配線を丁寧にあたらないといけない。だけど。

ユガの言っている意味がまるでわからない。相手の女が「同意のものよ」と警官に詰め寄っている。

ユガの場合、致し方が尋常ではなく、物音に気付いた親が娘の部屋に駆けつけると、紐でぐるぐる巻きにされた我が子がいた、と。ここ最近、必ずといっていいほどライブに来ていた女だ。

「親のいる家はまずいだろ」
釈放されたユガの耳元に囁き、警察署を出る。

熱をはらんだ空気が、真上の太陽に支配されて、俺を攻撃した。目を細めた先に見える電光掲示板の降雨予告など、完全に疑う。曇りのち、なな子がいた。

「バツカじゃねえの？」

口の悪い、なな子の声を聞くと、妙に落ち着いた。

「なんでわかった？」

ユガが笑いながら聞く。

俺たちは、なな子から逃げていた。初めてユガが手を出した女が、なな子の友人であり同居人だった。なな子に迷惑をかけたくないとユガが言い、拠点を変えたのだ。

「新聞に載ったんだよ。どーすんだよ。訂正しねーぞあいつら」
「いいよ別に」

俺らは、といってもバンド内の俺とユガだけだが、しょっちゅう問

題を起こしているので、マスコミが面白がって記事にする。おかげで知名度も上がり、デビュ―もしていないのにこうして新聞にまで載る破目になる。話題作りだと叩かれることもあるが、関わってもない事件までも俺らのせいになっていることもある。だがユガは、怒りもせず、自分の記事を見つけては、物語を楽しんでいるように読み耽るんだ。

「ユガにい」なな子がガキの頃と変わらない呼び方をした。

「強えやつなんていねえよ。弱さを認めたら墜落する。自分に負けたような気がして。だからひとりでもやってこれた。けどなんでひとりにするの?」

「一緒に住むか?」

思わず、俺は言っていた。前から思っていたことだ。だが、なな子を切り離そうとするユガのやり方に、口出しもできずにいた。

「無理だ。俺という意味はねえ。俺自身にも意味がねえ」

打ち消して歩き出したユガを、なな子が追いかける。

「家族だろ。意味なんてたいした役割を持たない。そうだろ?」

ユガに対して、臆することなく言葉をぶつけられるやつは、こいつだけだろう。

ユガとなな子の間に血の繋がりはないが、こうして繋がっている。俺はふたりのあとについて歩き出した。

「そうだな。なな子の言うとおりだ。だけど、無理だ。一緒には住めねえよ」

「なんでだよ」

俺が後ろから問いかける。

ユガが立ち止まる。

「あいつは……佳歩はどうするんだよ」

俺は足が止まる。というより、すくんだ。ユガが女の名前を覚えるなんて今までであったか？ あるはずがない。

「佳歩も一緒に住めばいいんじゃないの？」

俺にしてはいい提案だろ？ いつものユガだったら一度ヤツた女と住むくらいなんでもないことだろう？ ユガにとっては狂気を掴まえるゲームに過ぎないのだから。

「できねえつつってんだろ」

俺を睨みながらも、口調は穏やかだ。

「別に私は、一緒に住みたいとか、そんなんじゃないで、私から逃げんなよって言いたいの。それに、佳歩はユガに会いたがっているあれからずっと」

ユガは、なな子を一瞥してから言った。

「俺は怖いんだよ。俺が俺じゃなくなるのが。佳歩のことを考えると、どうしてかワケわかんねえ。」

「ユガにい、それって佳歩を好きってことなんじゃないのか？」

まさか。ユガが女を好きになるなんてあるわけがない。あるわけが。気付いたら、俺は、ユガの胸元を掴んでいた。

「なんでだ？　なんで佳歩を壊した？」

「わかんねえよ。初めて会ったときから壊してみたって思ったんだから」

「俺はどうなる？　おまえに痛みを植え付けられた俺は」

俺は、視線を、ユガの胸元を掴んだ手（カラ）両腕にオトス。俺を壊すたびに、ユガは俺の腕にタトゥーを彫った。両腕に隙間なく埋められた墨は、ユガが俺を愛した証だと思っていた。

「やめる。シズク。あたしたちは家族なんだよ」

なな子、おまえもユガと同じことを言うんだな。

こんな皮膚は要らない。俺を無闇に覆う偽証の飾り。

ユガが恋愛に悩んでるって？ 全く笑わせるぜ。

俺はユガの腹に思い切り蹴りをブチ込み、家に帰った。【支離滅裂】を、音量最大にして聴いた。脳ミソが掻きむしられる。マスターアドのユガのウタを、声を、心に染みのように響かせたかった。

いや、違う、俺がユガのウタに染み入りたいんだ。神に浸透したいんだ。マスターアドはユガがいなけりゃ成立しねえ。ユガのウタでなければユガの声でなければ成立しねえんだ。

この俺も。

支離滅裂

順番通りに行儀良く破壊しろ

支離滅裂

宥めるように優しく犯せ

誰にも命令されやしない

俺の言葉をもって崇め

俺の愛を傷にノコス

深きまで挿入する

お前の味を喉の奥で確かめる

甘さも苦さもわからねえこの舌で

唯一

お前の脈を感じ

軽薄に飲み込む

いいか

順番通りにデタラメに

破壊する

俺の言葉をもって崇め

#5 (前書き)

- syrup - ラスト

俺の犠牲は、おまえの一部になったんじゃないの？

昔はよかった。

母さんがいて、父さんがいて。母さんはすぐに怒るけれど、父さんはいつもかばってくれて、優しくかった。どうしてこんなふうになっちゃったんだろっとな。

俺は引き出しを開け、奥にあるハガキを取り出した。もうずいぶん古い消印のものだ。

病気を患った母さんから届いたものだ。寂しいとか、会いたいとか、一緒に暮らそうだとか、東北はいいところだとか、ミミズの張ったような、おさまりのない字で書いてある。俺はバカだけど、字だけはうまかったからな。母さんには似なかった。だけど、顔だけは似てしまった。この顔のせいで……。父さんは俺を抱くとき、母さんの名前を言うんだ。

母さん。俺はあなたを憎んでいます。父さんが変わったのは、あなたのせいだから。

俺は、ハガキに火を点け、灰皿に放り投げた。炎を見ながら父さんを弔った。

俺は中学に入り、新聞配達をするようになって、貯めた金でひざ掛けを買った。母さんに送ったけれど、そのひざ掛けを、母さんが使うことはなかった。

ハガキは燃え尽きて、すぐに灰になった。人間も、こんなふうになられるのかな。最後に見た父さんもさらさらの粉になっていた。

俺は父さんの粉を抱いて、ユガを見た。ユガは、優等生のような顔付きで立っていたつけ。

俺は腕にアルコールを浴びせ火を点けた。

クソみてえな痛さはきつと、ユガという病から、俺を導き出してくれるだろう。

「バカか？」

という言葉とともに、俺は水をブツ掛けられていた。

ユガが、バケツを持って劣等生の顔付きで立っていた。

「俺はどこにもいかねえよ」

マスタードの新曲が流れ出した。ウタを聴きながらヨウヤク理解。配線が繋がった。

「欠片は佳歩が持っているのか？」

「わからねえ。そうであつて欲しいとは思つ」

絶望・俺が男であることに。弟であることに。

「俺はマスタードもユガも失うのか？」

「なあ、シズク。俺は神でもなんでもねえよ」

「俺は……俺はユガを失うのなら、マスタードを失えないよ」

どうか、俺からユガを取り上げないでくれ。俺にとっては神なんだ。だって、親父から救ってくれたんだ。

「最後でいい。最後に俺を」

ユガは頷いた。ユガが俺を抱き締めて囁いた。

“シズクも欠片持つてんだぜ”

これは超越した愛だ。おまえは味のわからない舌で俺の一部を飲み込んだ。喉仏はたんなる通過点。その先に蓄積している俺の分身は、きつと甘い。

「へー、タトウーって自分で彫^いれられるんだ」

ミナの眩きに過剰に反応して、あたしは興味津々にミナの見ている雑誌を覗く。

「めんどくせーよ」

と言いながら、ミナが放棄した雑誌を受け取り、あたしは表紙を見つめた。？ミュージック二月号。？系のバンドばかり取り上げている雑誌だ。盤ギヤであるミナの専門書だな。

表紙には、口元をピアスで埋め尽くしたV系のミュージシャンが映っていて、胸元には、星が二つ連なったタトウーが彫られていた。

そのバンドの特集のあとに、いろいろなたたウーの写真、そして、『自分で彫れる！』というタイトルのページにたどり着いた。そこには、自分で彫ったというタトウーが紹介され、彫り方の詳細が書かれていた。

ミナは、別のファッション誌を手に取っている。執着の無い捲り方をするミナに、決意を報告。

「あたし、やる」

「まじかよ」

ミナはガムをくちやくちや噛みながら、

「手伝わねーぞ」

とこつちを見ずに言った。

「文房具屋行こ」

「なんで」

かったるそうにミナが答える。

「インク。このインクが一番濃く出るんだってさ」

あたしは雑誌を開いて、『用意する物一覧』を指差した。

初めてタトウーを見たのは、高校生のときだった。あたしは、どちらかといえば、勉強もちゃんとやるほうで、真面目な部類だった。両親が厳しかったから、仕方なかったというのもある。なんとなく、あたしはいい子で、まあそれが当たりまえだと思っていたし、反抗心なんてのも芽生えなかった。おさげ頭に、標準の長さの制服、門限の六時前に帰るという家庭内の規定も、あたりまえのことだと思っていた。

それがあたりまえじゃなくなる日は簡単に訪れた。親の離婚だ。両親の仲がいいということは、あたしには自慢だった。父親はサラリーマンで仕事が忙しく、毎日のように帰りが遅かった。夜はあまり会えなかったけれど、休みの日は家族の時間を大切にしてくれていたように思う。親が喧嘩をしているところも見ることがなかった。だけどそれは、あたしの前だけの姿だった。いつものように学校から帰ったら、ママが泣いていた。ダイニングのソファの横で、フロリングにぺたんこ座り、少女のように泣いていた。パパはいなかった。いないのはいつものことだから、当然といえば当然なんだけれど。家族でしかわからない、空気の比重の違いに、辺りを見回した。

パパが、いた？

テーブル上にある、コーヒーが残ったカップ。うちでは、コーヒーを飲むのは、パパだけなんだ。パパは、出されたものは、絶対に残さないのに。

そのとなりに「離婚届」が置いてあった。パパの名前が書いてあり、印鑑が押してある。なにこれ。テレビで見るとようなシチュエーション。

「パパは？」

「出てったわ」

あたしは、パパの部屋を確認した。荷物がすべて無くなっていた。

もうそれは、初めからこの家には存在しなかったくらいに。
ダイニングに戻り、ソファアームに座った。パパが座っていた温もりな
んで、とうにない。離婚届の筆跡と、冷めたコーヒだけが、パパ
の、かろうじて、残骸。

原因はパパの浮気だったのよ。長い間、我慢してきたわ。毎日、残業なんて言って、本当は向こうの家に行ったのよ。相手に子供が出来て、パパ、面倒を見たいって。どうしよう、佳歩、もう、ママには佳歩しかいないのよ。ママに必要なのは、佳歩なのよ。

聞きたくないけど、私は黙っていた。ママは、涙と鼻水ごちゃまぜの顔をしていた。もう化粧なんかとろけている。

聞きたくない。

原因なんか、あたしにはどうだっていい。あたしには関係ない。

テーブルの下にあった予備の新しいティッシュ箱の蓋を、ペリッと開封して渡した。今のママに必要なのは、ティッシュだ。

その日を境に、パパに会うことはなかった。パパはあたしを捨てたんだ。あたしの前でみせる仲のいいふりも全部仮面だったってことだ。結局、パパもママも、「長い間」あたしを騙してたんじゃない。あたしはそう思わずにはいらなかった。

あたしは「普通のいい子」でなくなった。初めのうちは泣いてばかりいた母親には、年下の彼氏ができた。遅く帰っても厳しいことを言わなくなった。かえって遅く帰ったほうが、都合がいいみたいなきさえした。

あたしは、その彼氏に犯された。そいつの腕には、タトゥーが刻まれている。

タトゥーを入れることに、特に理由なんてない。特別な思い入れなんてない。

ただ、入れたい。それだけ。

「あつたぜ」

ミナの黒爪の指先で、お目当てのインクがふりふりされていた。

「あと必要なもんは？」

催促されて、買ったばかりの雑誌を取り出し、ミナに見せる。

「ノートはあるだろ。ペンもある。針と糸は……」

「あるわけねー」

ミナと声一致する。あたしらはバカでかい声で笑い合った。エプロンをつけた若い店員が、怪訝そうにあたしらを見る。

ミナとあたしは、同じパンクバンドが好きで、ライブを通して知り合った。打ち上げで目の前に座ったのがミナだった。

黒い服に身を包み、長い黒髪を無造作に束ねて、目をぐるりと黒いラインで囲んだスタイルミナのは、にこりともせず酒を飲んでいた。酒にやけに強く、やけに弱いあたしを介抱してくれた。

それから仲良くなり、相変わらずにこりともしないけれど、ミナの優しさはあたしが一番にわかってるつもりだ。

今は一緒に暮らしている。家を出たいんだ、と打ち明けたら、ミナが、部屋を借りて一緒に住もうか、と言ってくれた。

アパートを借りるとき、ミナの本当の名を知った。

あたしは今、ミナに近い存在だけれど、ミナのことをなにも知らない。ミナは自分のことを話したがらない。それでもよかった。ミナが時々笑ってくれると、あたしは安心するんだ。

あたしは、パンク系のショップでバイトをしている。

「仕事しろよ、ヴァカ」

カウンターの前にノートを広げ、タトゥーの図柄を模索中のあたしに、忙しそうに店長が言った。白に、ピンクと黄緑のメッシュ、腕には怪しげな文字が隙間なく彫られていて、見た目はヤバいくらい怖いけれど、優しい人だ。

あたしが好きなバンド、『マスタード』のベーシストで、打ち上げに行く度に仲良くなり、バイトを探しているというので、名乗りを上げた。この店で働けば、『マスタード』のボーカルのユガに会えると思ったから、という安易な考えなだけだ。

ユガは店長とは違って、独特な威圧感を持っていて、近寄りがたい存在だった。思惑通り、かなりの頻度で店にきたけれど、会話を交わすことはなかった。店長には「あいつには近づくな」って言われていた。そこにどんな意味が込められているかなんて、そのときのあたしは、まるでわかつちやいなかったんだ。

あたしは仕事もしないで、ノートに絵を描いていた。蝶、ドクロ、十字架、有刺鉄線…パンキッシュなものばかり。店内で目につくかっこいいイラストレーションを見つけては、真似をして描いていた。「なにしてんの、こいつ」

あたしは、かなり集中していたのだろう。

気がつかなかった。目の前にユガがいた。頬杖をして、あたしのへたくそな絵をユガが見ていた。あたしは緊張のあまり体が硬直した。こんなに至近距離でユガを見たことないし。店長が通りすがりに声を掛ける。

「自分でタトゥー彫るんだって。痛えぞ、ヴァカ」

「ふ〜ん」

ユガの唇が片方上がる。ユガの特徴のある笑い方。

「これにしる」

と有刺鉄線を弾いた。そして店長をちらっと見てから、あたしの耳元に、

「彫るところを見せて」

と囁いた。

「あいつには内緒な」

ユガはあたしの手からペンを取り、十字架の中にケータイのアドレスを手早く記した。あたしの書いたセンスのない十字架の落書きが一瞬にして芸術度を高めた気がする。

あたしが頷いたのを確かめると、ユガはノートをパタンと閉じた

家に帰るとミナはいなかった。ユガのところへ行く準備をしていると、ミナからメールが入った。

> 残業で遅くなるぞ〜

薄化粧で髪をきちつと束ねてパソコンに向かっているスーツ姿のミナを想像した。

> ユガのところで

途中まで書いて、やめた。

ミナにも、「ユガは危ないって聞くから、近づくのはやめておけ」
って言われている。行き先は書かずに、

> タトゥーのことで出掛けてくる

とメールを入れた。

材料をバッグに詰め込んで家を出た。外は雪がちらついていた。あたしの白いエンジニアブーツの下で、その粉は、一瞬のうちに踏み潰され消えていくのだろう。

指定された場所で、ユガにメールを打つと、ユガはすぐに現れた。

「こいよ」

おんぼろアパートの脇を通り過ぎて、怪我をしてミヤ〜と見上げる猫のそばを通り過ぎ、高級そうなマンションを通り過ぎ……ずに、白いガーゼシャツにサンダル履きのユガが入っていく。振り返ると、猫はもういなかった。

「入れ」

ユガらしい、一言の命令口調に従う。

それにしても。立派なマンションだ。デザイナーズマンションというやつかな？ リッチな美容室みたいな感じ。ライティングされたガラス張りの扉の向こうから、カリスマな美容師が今にも出てきそうで、あたしは妙な緊張感を持って、ソファアに座る。

そういえば、ユガのことはマスターアのウタうたについてことしか知らない。年齢すら。

「どうした？」

「ユガってなにもの？」

「イラストレーターやってる。お前の店にも、俺のデザインしたものの置いてあんだろ」

「知らなかった」

「早くやるうぜ。有刺鉄線だろ」

「なんで有刺鉄線なの？」

「きれいだから。トゲがいい」

意味わかんないけど。

「あんまりちゃんと見たことないから、よくわからないんだよね」
あたしはノートをめくった。何度も書き直して、やっと書いた絵だ。

「あるぞ」

ユガはそう言うと、ソファの下から、束になった有刺鉄線を取り出した。道端でよく見る錆びついたものとは全く別物のようで、真新しいそれは、光沢を惜しみなく輝かせたオブジェのようだ。

「どうして持っているの？」

あたしは、鉄線の尖った先に指先をあてがった。

「資料だよ」

「……てことは、これを見てユガがデザインした物が店に並んで、あたしはそれを見て絵を描いたってこと？」

「そういうこと」

恥ずかしくなつてノートを閉じた。店長、ごめんなさい。あたしは今日、仕事もろくにしないで絵を描いていました……。

「下書き描いてやろうか？」

あたしは頷いた。

ユガはあたしの腕を掴み、ペンで有刺鉄線を描いていく。

あつという間にそれは腕をぐるりと一周し繋がった。

「どう？」

「すごく気に入った」

「彫つてやるよ。原始的なやり方で」

「原始的なやり方？」

「用意したんだろ？ つつても針と糸とインクがあればできるけどな。俺が彫つてやる。材料出せ」

「うん」

あたしは言われるままに材料を出した。

ユガは針を消毒し、先端に糸を丁寧に着いていった。小皿にインクを垂らし、針の先に含ませると、何も言わずあたしの腕を掴み、下書きの線の上に、ぷつりと針を差し込んだ。

あたしは一瞬、身を引いた。

ユガが、にやりと笑ったような気がした。痛いけれど、ユガの冷たい指先が心地良かった。

彫られているあいだ、ユガの耳の軟骨のピアスや、唇のピアスをずっと見ていた。皮膚に埋め込まれている金属に、時々そつと触りたくなった。

ユガとあたしはなにを話すこともなく、ユガはあたしの皮膚にインクを埋め続けた。だいぶ痛みにも慣れてきた。

有刺鉄線は、少しずつ確実に、あたしの腕を縛りつけていく。

何時間経ったのだろう。

ここは時が止まっているような気がした。

部屋には時計がなかった。

ユガの世界。

あたしの皮膚を針が打ちつける。

滲んだ血の縁が固まって黒味を帯びている。

世界に果てがあるのなら、壁はきつとこんな血のかたまりなんだろう。

張り巡らされたきれいな有刺鉄線も、いつかは錆び、滅びゆく。

だけど、血の壁の中に支えられて、朽ちることはない。

永遠に閉ざされたまま、切っ先を光らせている。

薄情と冷たさを持った高貴な壁だ。

あたしは、ユガの世界に飛び込みたかったんだ。

たとえ、どんな痛みが待ち受けているとしても。

普通の女の子だったあたしが、家を飛び出して、行くあてもなく街の中を歩いていった。

あんな男に体を奪われたことなんかどうだってよかった。ただ、裂けるような痛みと、シーツについた血の跡に、びっくりして泣いただけだ。

しばらく歩いていると、古びたライブハウスの前に着いた。ロックとかバンドとか、今までのあたしには、どこか遠い世界のものだった。流行りの歌謡曲は聞いていたけれど、学校の友達に合わせて聴いていただけのような気もする。

あたしの知らない世界がすぐ目の前にあった。

ライブハウスの前には、黒づくめの女の子たちがぞろぞろと並んでいた。

怖い。

通り過ぎようとしたとき、女の子たちがざわめき出した。

女の子たちの視線の先に、まだ名前も知らない『ユガ』がいた。

不思議な光景だった。

有名な人らしいのはわかった。けれど、女の子たちは遠巻きにユガを見ていた。みんな口々に「ユガ」と言っていることから、ファンなのはわかったけれど、誰もユガに近づこうとはしないし、ユガもまた、にこりともせずライブハウスに入っていった。

なんだろう、この人たち、と思ったとき、そばにいたジャージ姿の女の子と目が合った。髪の毛をふたつに束ねるその姿に、あたしは妙な親近感を抱いて、「あの人は、誰ですか？」なんて聞いていた。女の子はにこつと笑った。ものすごく美少女な子だった。学校ジャージがかすむぐらいの。

「マスタアドというバンドのボーカリストのユガですよ」

そう答えて、女の子はライブハウスの扉の向こうに消えた。黒づくめの女の子たちも、次々に黒い扉の向こうに吸収されていく。あたしは、知らない世界を覗いてみようと思った。

ジャージ姿の女の子に出会わなければ、入る勇氣は持てなかった。あの男に抵抗したときに、シャツが破けたので一応着替えたけれど、あたしの持っている服なんて、プチプライスの冴えないのばかりだから。

ふと、あの男を思い出した自分を嫌になる。あたしは、変わる。ぎゅっと手を握りしめて、一步踏み出した。

扉の向こうの世界は、薄暗くて、目が慣れるまで、本当に闇に入り込んでしまったような気がした。チケットの買い方すら知らなかった。見よう見まねでチケットを買い、握りしめた。

人のざわつきに飲み込まれながら、適当な場所に立った。黒い服に身を包んだファンたちが、ステージの前方を陣取っている。溢れかえる人たちで、先ほどのジャージの女の子の姿は見えない。ステージに微かなライトが当てられ、ユガが現れると、急に会場がしん、とした。

暗闇の中に、白い服を着たユガだけが神のように、そこにいた。こちらを睨みつけて、ユガはなにか、暗号のような言葉を発した。なにを言っているのかは、よく聞き取れなかった。

「…コウソク…スル…」
拘束？

突然、眩しいほどの光が交錯しステージを照らした。ユガが一瞬見えなくなる。

ギターの音が激しくなり、音楽が始まった。そこにいる誰もが心の叫びをぶつけるように腕を上げ体を揺らした。あたしもだ。

気付いたら、あたしも、なりふり構わず叫んでいた。

ユガは、受け止めてくれる。

マスターアドは、あたしの絶望を受け止めてくれるんだ。

ここには、探し求めた「自由」がある。ユガは、あたしの自由を容赦なく拘束した。

あたしは知った。神はたやすく笑わない。威圧感で囚人を罵るのだ。その日、あたしは家に帰って、母親に会っても、その彼氏に会っても、何事もなく振る舞えた。もともと、その男も、何事もなかったような顔をしてソファーに座っていた。そこは、パパが座るべきの席だ。……どうでもいいか。どうでもいい。犯されたことも。今までの出来事すべてが、どうでもいい、ちっぽけなことのように思えた。

「いつたい何時だと思っているの？」

母親がくどくど言う。

「遅すぎよ。まだ高校生なのよ。ごはんは食べたの？」

あたしは、冷蔵庫を開け、冷たい水をコップに注ぎ、一気に飲み干し、

「うるさいな」

と言い放つのと同時に、コップをテーブルの上にドン！と置いた。母親が黙った。あたしがこんな口のきき方をするのは初めてだったから、びっくりしているのかもしれない。

「あたしを拘束するな」

あたしは視線から母親を除外して、男を見た。男は目をそらし、「もう高校生なんだから自由にしてあげても」なんて、ニヤニヤしながら母親をなだめている。

ふたりを横目に自分の部屋に入った。そんなことより、そのときのあたしには、ユガの歌を聴くことのほうが重要だった。買ったばかりのマスターアドの歌を流した。

あたしの自由は、ユガに預けてある。あなたたちには解放できない。貯金を下ろして、髪の色を抜いた。パンク系の服もいっぱい買った。ライブハウスに通ううちに友達もできた。ミナとも知り合えた。

高校を卒業したあたしは、家を出て、バイトをしながら友達の家を

転々とした。

あれからもう、家には帰っていない。

今、あたしの目の前にユガがいる。あたしを嚴重に拘束したユガが、目の前にいる。

黒いソファーだけしかないこの部屋で、ユガは何を見つめるのだろう。あたしはその行方を知りたかった。その先に行ってみたいと思っただ。

「ねえ、ユガ」

ユガは指先を止めることなくあたしのことを、ちら、とみた。長めの黒い前髪から、瞳が見えた。ユガの目が好き。人を威圧するような鋭い目つき。

「ピアス、触ってもいい？」

「好きにしれ」

ユガは、タトゥーを彫り続けている。

あたしは手を伸ばし、ユガの耳に触れた。

……もつと不協和音なものなのかと思っていた。金属は耳の一部のようで、しこりのようだった。唇のリングに触れると、ユガが手を止めてあたしを見た。あたしは怯えていたかもしれない。ユガはあたしを睨んでいた。そう見えるのはユガの癖なのかもしれないけれど。

ユガはピアスに伸ばしていたあたしの腕を掴み、あたしにキスをしてきた。

「舐めてみ」

言われるまま、舌でピアスに触れる。

不協和音の味がした。

ユガはまたキスをして、何事もなかったかのように彫り出した。だけど、違う。

さっきまでの彫り方と痛みが違う。

「ねえ、ユガ。痛いのに」

そう言うと、ユガの唇の端が上がった。あたしの腕を掴む力が強くなった。

痛みに我慢出来なくなったあたしの唇から、声が漏れた。ユガは針を置くと、束の有刺鉄線の端を探り、あたしの両腕にぐるぐると巻いていった。そのままあたしの体にも巻きつけていく。

あたしはびっくりして、声も出せずにいた。

ユガは有刺鉄線の隙間から、服や下着を千切り取る。体のあちこちで、ユガの唇の不協和音を感じた。それはあたしの皮膚の一部一部に違和感を残していく。驚きのあまりなのか、ただ脅えているだけなのか、あたしは抵抗も出来ずにいた。

気付くと、ユガの手にはマスタードがあった。

ユガはライブのとき、テンションが上がるとマスタードを口に含んで歌う。よだれみために黄色いマスタードを垂らして歌う異様さは、ファンをより熱狂的にさせた。

マスタードはあたしのタトゥーに擦り込まれた。染みるような痛さにあたしは声を張り上げる。

「もっと喚け」

ユガの唇が片方上がる。ユガのモノがあたしのナカに入ってくる。

あたしは涙が流れていたけれど、恐くて泣いているわけではないよ。うな気がした。

ドウシテ？

オマエノナカニ狂気ヲミツケタンダ

……アタシニ？

マスタードの容器の先端をあたしの口の中に押し込み、ユガはゆっくりと容器を絞る。それは喉の奥にとろりと流れて、泣きながらむせると、ユガの舌に口の中を掻き回された。違和感。

なんだろう。ユガの舌の感覚は。

舌に何個か埋め込まれたピアスのせい？

違う、もっと軽薄な、感覚。

あたしのケータイが鳴き出した。たぶん、ミナだろう。ミナが心配している。ミナ……。叫びたくても声が出ないよ。

カーテンの向こうはうっすらと明るくなっていた。

ユガがシャツを脱いだ。ユガの胸にはタトウーが彫られていた。かなりデザインされているが、文字のようだ。

S……H？

あたしのケータイが鳴き止む。一呼吸置いて、ユガのケータイが鳴る。

「やべえ。シズクだ」

S H……I……Z U……K……

シズク……

店長？

ユガの携帯の音が途切れると同時に、玄関のチャイムが響いた。ユガは慌ててあたしから離れた。鍵がガチャリと開く音がして、ドカドカと中に入ってきたのは、店長と　　ミナだった。

#13 (前書き)

一部、名前が変更となりました。

店長は見たこともない怖い顔でユガを殴りつけた。

「ごめんな」

あたしに向けた店長の声が震えていた。ミナはコートを脱ぎ、あたしにかけた。あたしも体が震えている。

「なな子、佳歩を連れて帰れるか」

「ああ」

あたしはミナに支えられ、キッチンで口をゆすぎ、原型の留まっ
ないスカートを直し、ミナのコートにくるまっ

ミナの匂い……香水の甘い香りに少し落ち着いた。表に出て、拾っ
たタクシーに乗り込んだ。

「ごめんな。佳歩を巻き込みたくはなかった」

「店長、ミナのこと、なな子って呼んでた」

ミナはまっすぐ前を見ながら、

「兄弟だ」

と言った。

「えっ？」

「シズクとあたしは母親が同じで、ユガとシズクは父親が同じ。ユ
ガとあたしは、血は繋がってないけれど、兄弟だよ」

あたしは言葉を失い、ミナのガムを噛む音が響くのを聞いていた。

「だって……ユガと店長って……よくわかんないけどさ、なんか変
ていうか」

店長がユガのことを「好きらしい」という噂は、フアンの間では有
名な話であって、所詮、噂に過ぎないと思っていたけれど、店で働
くようになってからは、「らしい」はあたしの心の中では取り外し
可能な助動詞となっていた。

ミナがあたしを見た。呆れたような顔で笑った。

「私らは母親に捨てられた者同士なんだ。親父が死ぬまで、みんな

一緒に育った。私だけが親戚の家に預けられた。

それからずっと会ってなかったんだ。偶然マスタのことを知ってライブに行った。ふたりに会って、とっさにミナって嘘ついちゃったんだ。いるだろ？ モデルの。そいつのポスターがちょうど貼ってあってさ。

あんたと連絡つかなくなるなんておかしいからさ、シズクんとこ行ったんだ。それで、私はなな子だよって言ったら、わかってたってユガがすぐ気付いたって。わかってて私をミナとして呼んでくれてたんだ」

ミナが自分のことを話すのは初めてだった。あたしは、ミナに少しだけ近づけた気がして、嬉しかった。

次の日、店長から電話があった。

「ユガの精神状態が良くないから、店をたたむことにした」

「ユガは、どうしているの？」

「大丈夫だ」

大丈夫と言われると、なにも言えなかった。

「給料はちゃんと振り込むから」

電話が切れる。ミナが、

「どうした？」

と聞いた。

「バイト、首」

「なにそれ」

なにこれ。あたしの目から涙が落ちている。

「なに泣いてんだよ」

ベッドに横になっていたミナは、起き上がり、胡坐をかいた。

「わかんない。おかしいかな。あたし。あんなことされたのに、ユガのこと」

「鼻垂れてんぞ」

ミナはティッシュであたしの鼻を拭いた。

それからぼんぼん、と頭を撫で、

「また会えるといいな」

とつぶやいた。あたしに言ったのか、自分に言い聞かせたのかは、
わからない。

窓越しに雪が降ってくるのが見えた。

#14 (前書き)

- mustard - リスト

休日には、よく家族で出かけた。映画やショッピングにカラオケ：パパは、行き先の決定権を、あたしに与えてくれた。パパとママに挟まれて、三人で歩いた。そして、決まって休憩時になると、行きつけのカフェに寄った。オープンな店内は、作っているところを目の前で見ることができるとなっている。

あたしは決まってその店の売り商品のデコパフェを頼んだ。

「今日はなににするの？」

「うーんと。バナナといちご」

パフェ担当の店員は、いつもフルーツやトッピングをおまけに足してくれた。

「こんな雪が降る日でも、パフェなんだな。佳歩ちゃんは本当にパフェが好きなんだね」

あたしは、その店員がパフェをデコレーションしているのを見るのが好きだった。出来上がると、飛び切りの笑顔で渡してくれる。肘まで捲ったシャツの袖のその奥に、タトゥーが刻まれていることなんて、思いもしなかったことだ。

あたしは、色鮮やかに盛られたパフェと、その店員の笑顔を受け取りたいだけだった。

あたしのどうでもいい話を聞き終わって、ミナは言った。

「そのデコパフェとやら食べに行くか？ まだいるのか？ その男」

ミナは酒好きだが、甘党だ。

「そんで、言っちゃえ。あたしは甘いのがなんか嫌いだってな」

早速、ふたりで出かけることにした。そう、あたしは甘いのは嫌いだ。甘いのは、嫌い。なのに、あたしときたら、

「いちごパフェちょうだい」

なんて言っていた。いいもん。ミナにあげるもん。店員はあたしの顔を見て、驚いた顔をした。

「佳歩ちゃん……？」

「いちごチョコパフェ、特盛で」

彼の長い指先が、いちごを盛り付けるのを見つめた。

「ママは元気にしてるの？」

そう聞くと、

「別れたよ」

と、彼は言った。

「連絡取ってあげなよ」

とも言った。その発言には答えなかった。

「はい、お待ちどうさま」

彼は、飛び切りの笑顔でデコパフェを差し出した。

綺麗な笑顔だった。ロボットみたいだ。

あたしはパフェを受け取り、うつむいて深呼吸をし、彼の顔めがけてパフェを投げつけた。笑顔のまま固まるロボットを見る。ミナがダッシュで近づいてきて、あたしの手を引いた。

「行くよ！」

ふたりで逃げるように店を出た。

「待ってよ、なな子！」

少し走ったあと、息を切らせながら、ミナはゲラゲラ笑っていた。あたしも可笑しくて笑った。こんなに笑ったのは久しぶりだ。ミナが涙を浮かべて顔をくしゃくしゃにして笑うなんて……笑うんだ。

「しかし、もったいねーな」

「あ、ごめん、食べたかった？」

ミナはあたしの頭を撫でた。

「ね、佳歩、私のこと、なな子って呼んでたよ」

あたしは一瞬考えて、あっ、と声を漏らした。

「それでいいよ。そう呼ばれたほうが、いい」

そのときの、ミナ……なな子の笑顔は、飛び切り可愛くて、抱きしめたいくらいだった。

「おいしいの買って帰ろう、なな子」

「あつたかいやつにしようぜ」
あたしは歩きながら、手のひらで雪を受け止めた。
雪は薄情に消えていった。後味は冷たく、あたしを罵っている。
まるでユガに触れているようだった。

あれから半年が経った。

腕に刻まれた有刺鉄線に触れる。

今でも時々、無性にマスタードの刺激が欲しくなる。あたしの自由は、未だ、ユガに従っている。

闇雲に狂気を求めていた。

痛み奥の奥に忠実に潜む『カイラク』を剥ぎ、黒い穴を埋める為に。黒い穴は無数にある。俺の体中を蝕んでいる。どこから発生したのかはわからない。狂気が足りないってことだけはわかっている。完全なるニクタイを手にするまで。俺は。

「断る」

プロダクションの社長、横峯に向かって言った。俺の口の中のガムがクチャクチャと騒ぎ立てる。

俺のバンド『マスタアド』を嗅ぎ回っていたのは知っていた。

「マスタアドは誰にも渡さねえ。特にあんたにはな」

お決まりのふかふかの椅子に背を預けた女社長は、料理をしたことのなさそうなすらりとした指で、長い黒髪を掻きあげた。趣味の悪い蛍光灯が、爪に施したラインストーンに反射する。指先を動かすたびにいちいち反応するそれは、俺の機嫌をいちいち損なわせた。

「ここを断ったら、よそでもデビュー出来ないわよ」

「俺にかかわるな」

床にガムを吐き捨て部屋を出た。

黒い穴が疼く。

ケータイを出し、番号だけの登録を探し電話をかける。相手の女はすぐにきた。ホテルに連れ込みすくに犯^ヤる。初めは抵抗のフリをみせていたが次第に身をよじる。

“チガウ”

コトを終えたあと、女は、ねえ、また会える？ と聞いた。

「ライブにくりや会えるだろ」

俺は服を着、余韻に浸る女を残しフロントに向かう。フロントのバイトは呆れ顔で、

「お前そのうち刺されるぞ」

と言った。

「探しているんだ」

奴はカウンターの小さな窓から俺を覗いた。

「欲情の蓋」

と言うと、

「ふうん蓋ね」

と小窓が呟いた。

「なあ。アリはメジャーになりたいか？」

「そりゃあな。だけどマスターアドでないと、ユガでないと意味は持たないな」

「ずいぶんな過大評価だな」

「だな」

トレイに金を置き、そいつを掴む指先を見た。マスターアドのギターリスト・蟻砂アリサの指は、しなやかに俺を評価する。指先の奏でる音律に、いつだって俺は、自分の精神を高めることができた。それが身に余る旋律だとしても、だ。

ホテルを出、歩きながら、ケータイの名無しメモリーを消去する。

“チガウ”

“黒イ穴八埋マラナイ”

家に帰るとシズクが寝ていた。俺は、シズクの寝ているベッドの端に腰掛けた。

奴は俺の弟でありながら、俺を崇め俺を愛した。

俺はどうだろう。俺は奴を愛したか？

親父に嫉妬していたわけじゃない。親父のオモチャを横取りしたいだけだった。シズクの苦痛の顔が俺をそうさせた。助けたかったわけでもない。親父が憎かった。俺を創造した親父が。

だけど、手に入れたオモチャは、俺の与える刺激には、あの親父に見せた苦悶の表情を見せないのだ。物足りねえ俺は、シズクの皮膚に墨を刺し、痛みに耐えるシズクの顔を見てクロイアナという空腹を満たした。だが、それは一時的でしかなかった。

今ではもう隙間がないほど墨に埋まったシズクの肌には、興味が疼かない。

シズクが目を覚ます。怪訝な顔に向けて俺は言う。

「マスタアドやめねえか」

「何を言っているの？」

「歌いたくねえんだよ」

あの女に盗られるくらいならな。

シズクが起き上がり、タバコをくわえた。俺はライターを拾い、先端を焦がしてやり、息づいたタバコを奪った。俺は普段タバコを吸わない。ボーカルとして喉のためにでもない。相変わらず、うまいとも感じないタバコの煙を吐いた。

「まったく、ガキのころから変わらんねえな。その突拍子もない自己中」

シズクの言葉はいつだって俺を苛つかせる。

お前に言われたかないね。少なくとも今のお前にはな。

昔のシズクはもっと自分を抑えつけていた。

と言っても、俺がシズクを知ったのは小学五年になったときで、それ以前のシズクを知っているわけではない。

俺は母親に連れられて西脇家に預けられた。梅雨の切れ間のジメジメした蒸し暑い日だった。

見たこともない住宅街を逸れて細い道を走るタクシーの中で、騙されたことによく気付いた俺は不機嫌にガムを噛んでいた。

「病院に見舞いに行く」という母親の言葉に着いてきて、このザマだ。

朽ちかけた長屋の玄関に、朽ちかけた男と嘘つきババアが挨拶を済ませたところだ。

「なにか必要なものがあれば送るわよ」

返事をしない俺を横目に、母親は小さなバッグから分厚い封筒を取り出し西脇に手渡した。西脇は嬉しそうに封筒を受け取った。

玄関から出て行った母親を追いかけて、俺は聞いた。

「俺を売ったのか？」

「西脇はあなたの父親。これからの生活費を渡しただけよ」

「俺の……父親？」

「そうよ」

開け放しの門から出て行くこととする、母親の露出された背中が俺を

制御した。俺はなぜかここから出てはいけない気持ちになって立ち止まる。

「あの男と一緒にいるのか？」

母親は顔色一つ変えず、真つ赤な口紅から舌が覗かせ言葉を紡いだ。「いいわね、西脇悠我として生きなさい」

そう言い切ると、残り香を置き去りにして、一度も振り向くことなく颯爽と歩いていった。爪楊枝のように細く、高いヒールが、カツカツとアスファルトを削り、散れた石屑に一滴の雨粒が降りた見上げると、灰色の雲が重そうな体をぐずつかせてひしめき合っていた。そこから生まれる落雨は、母親の痕跡を確実に消失させていった。

西脇の家に入ると、俺の「親父」という男は酒を飲んでいた。

男は封筒から二万円を出し、これで学校に行くのに必要なもん買つて来い、と言った。俺は必要なものがわからないと答えた。学校に行つたことがないからだ。

「俺、学校に通えるのか？」

「ああ。そろそろシズクとなな子が帰ってくるから、一緒に買い物に行くといい」

シズクとナナコ？

「お前の兄弟だ」

俺のキョウダイ？

茶褐色のゴツゴツとした指から金を取り、ポケットに仕舞う。

学校に行けることは嬉しかった。母親は、俺が外に出るのを嫌がった。家には専任の教師が来ていて、俺の知能指数はそのへんのガキどもより、はるかに高く仕上がっていたし、週のうち三日はトレーナーが迎えに来て、格闘技スクールに連れて行かされていた。未知を知り、頭脳に整理する作業や、技を体得することは、なにより楽しかった。

今更学校なんかに行つて勉強しても退屈なだけかもしれないが、行ったことのない学校という場所は、そのときの俺には未知だったの

だ。

「へえ。おにいちゃんかあ。何年生？」

シズクは愛想よく俺に話しかけてきた。頭は弱そうだ。妹の方は、学校に提出する俺の書類を見ていた。

「五年か。げ、担任最悪だぜ。西脇……悠我か。ユガにい、よろしくな。私とシズクは四年なんだ」

荒い言葉遣いのなな子は、片方だけにできる可愛らしいえくぼの笑顔を向けた。

ふたりとはすぐに打ち解けた。シズクもなな子も母親が違う。三人とも母親に捨てられた者同士だった。

親父は無口な人だった。いつも酒を飲んでた。昔は会社を営んでいて、今より肉付きも良く、貫禄があったという。酒癖と女癖が悪く、女と争いになり、足を刺されて片足が麻痺し、会社の経営は嫁が主導権を取り、「親父は捨てられたんだ。バカだろう。」

この家に住む奴らはみんな捨てられて集まった者同士なんだ」シズクは笑いながら言い、「その刺した女つてのは俺の母親なんだよね」と続けた。

親父の左太股には確かに傷跡が残っていて、杖に頼り足を引き摺って歩いてた。出歩くこともなく昼から酒を飲んでた。

買い物は俺たちが行き、食事も俺たちでこしらえていた。シズクとなな子は、生活費の中の僅かな金で、飯を作っていた。なな子はよく失敗するが、シズクの飯はうまかった。俺はふたりから飯の作り方を教わった。親父がまともに飯を食っているのを見たことはない。酒があいつをかるうじて運営していた。

四人で暮らすには狭い部屋だった。四畳半と六畳の部屋には仕切りがなく、もともとは襖があったようだが、シズクが言うには「父さんが暴れて壊した」という。

「暴れる？」

「前は、よく暴れていたんだ。今はそんなことないけれど……」

シズクは、いつになく陰りを付着させて言った。

ある夜のことだった。

「嫌」

か細く、幾度となく繰り返されたシズクの声で目が覚めた。体を起こし、目をこすりながら見ると、となりの布団にシズクの姿はなく、その向こうに、布団を頭からかぶり、四畳半の部屋をじっと見つめているなな子がいた。なな子の視線の先を追う。

部屋の電気は消えていたが、テレビの明かりが親父を照らしていた。親父は、シズクに馬乗りになり、シズクの衣服を脱がしていた。ギョツと目を瞑り、への字にしたシズクの口に、親父の口が重なった。ナンダアレハ？

俺は目の前で繰り広げられている未知の映像に胸が高鳴った。やがて親父は腰を動かし、シズクは苦痛に満ちた顔をした。

俺は新たな未知を知る。苦痛に従うという未知だ。その顔は愛おしくも感じた。

「あれはなんなの？ 日本ではあれが普通なの？」

なな子とふたりだけの学校の帰り道に、俺は疑問を投げつけた。

「ユガにいだって日本人でしょ」

なな子が軽く笑った。

「俺もあんなことされるのか？ …… なな子も？」

俺が立ち止まると、一歩進んだなな子が足を止め振り向き、

「ねえよ」

と強く否定した。また並んで歩き出す。

「たぶん、シズクは母親にそっくりだから」

「シズクの母親？」

「ああ。親父はシズクの母親に惚れてんだ」

「あ、なな子ちゃん」

振り向くと、女の子たちが立っていた。どの子も、赤やピンクだの、チエックだのドットだのといった服を着、フリルだのレースだのと
いったスカートをはひらひらさせ、髪にも派手な髪留めやシュシュを
つけている。いつも同じ白いTシャツに学校のジャージ姿で、髪を
後ろに一つに束ねた姿のなな子は、うつむいている。ひとりのふり
ふりが代表して一歩前に出た。

「今日の私のお誕生会、きてくれるでしょう？ みんなくるのよ」

「私は……」

なな子が口ごもる。

「じゃ、待ってるから」

女の子たちは、キャツキャツとはしゃぎながら去っていく。

「行けばいい」

「行けるわけねえよ」

「どうして？」

「あいつら私をバカにしてんだよ。どうせこれるわけがないって。
お呼ばれに着ていく服なんてねえし、プレゼントを買う金もねえ。
表は優しそうに声かけて裏で私を笑ってる。聞いたんだ、あいつら
が私のことバカにしてるの。私は誰も信じない。……シズクとユガ
にだけ信じる」

なな子がポロポロと涙を零した。なな子が泣くのを初めて見た。

「こい」

俺は、なな子の手を引っ張った。

「どこ行くの？」

近くのショッピングセンターに行き、服売り場に向かった。

「ユガにい。そんなお金」

俺の腕を掴み、首を振ったなな子に、俺は言った。

「俺も誰も信じてねえ。俺を信じてくれるなら、なな子にだけ話す。いいか、親父には言うなよ。シズクにも。誰にもだ」

なな子はコクンと頷いた。

「ずっと小遣いを貯金してきた。いつか一人でも生きていけるように。だから金ならある。好きなものを買え。その代わりに親父にバレないように、服は外で着替えて帰りに捨てるんだ」

「でも」

「いいから」

ワンピースを着て試着室から現れたなな子は、スカートの裾をもぞもぞとひっぱりながら、

「似合わないよな……」

と、うつむいた。水色のシンプルなものだけど、なな子の焼けた肌にとっても似合っていた。

「俺が選んだの、似合わないわけないだろ？」

俺は自信を押しつけて、なな子の髪に、ハート型のヘアピンを挿した。

鏡を見たなな子の顔が、ふわぁつと明るんだ。

「このヘアピンは捨てなくてもいい？ ペンケースにしまっておけば、バレないでしょう？」

「いいよ」

「ありがと。ユガにい」

買った服とプレゼントを、ランドセルの隙間に押し込んで俺らは帰った。

「買い物に行ってくるよ」

親父にそう告げて、俺となな子はまた出かけた。シズクは友達も多く、毎日のように遊んでくるが、なな子は今まで友達の家に行くこ

とがなかった。急に友達の家に行くというのも不自然に思えて、親父に説明するのも面倒なので、黙っていることにした。

「俺が買い物をしてくるから、その間、行ってこい」

なな子は頷き、スカートをひらひらさせ歩いていく後ろ姿を見て、俺は満足した。うまくいったと思っていた。

なな子は、服を捨てられずに押し入れの中に隠していた。

ときどき、そつと取り出して、着ることもできない服を見つめていたらしい。それを親父が目にし、取り上げたのだ。俺が振り向いたとき、親父の手には、あの服があった。

「盗んだのか？」

親父は、なな子に詰め寄った。

「そんなことしねえよ」

なな子は、唇をぎゅっと結んでいる。

「盗んでないなら、どうやって手に入れたんだ？」

「友達にもらったんだよ」

「友達？ お前そんな奴いないだろう」

親父は鼻で笑った。

「俺だよ」

親父の濁った薄気味悪い目がこっちを向いた。俺は親父の手から服を取り上げ、なな子に渡した。

「なな子が友達の誕生会に呼ばれたから、俺が買ってやった。あんなには黙っておけって言ったのも俺」

「金は？」

「ここに来的时候き母親にもらった。だけど、もうねえよ。全部使っちゃまったから」

不機嫌そうに四畳半の部屋に戻った親父は、酒瓶の底にある酒を舐めるように飲み始めた。

このところ、酒の無くなるペースが異常に早くなっている。必要に迫られ、俺は自分の貯金から金を下ろして生活費に当てていた。

夏休みが始まり、一日中親父と顔を合わすのもうんざりだから、外に出てシズクたちと遊ぶことが多くなった。ガキの遊びと思っていた虫取りも釣りも意外と楽しくて、俺は今までを取り戻すかのよ

うに本気で遊んだ。駄菓子屋で涼んでいると、誰かが口にした。

「焼けたな、ユガ」

角やへりが錆に侵された古めかしい鏡の中央に立つと、紫外線に侵されまくったひよろひよろの俺がいた。ひよい、とシズクが隣に並ぶ。

「俺もシズクと同じ、ただのくそガキだったってことだ」

シズクが笑った。

「兄弟だもん」

俺も笑って、シズクの掴む棒の先の塊にかじり付いた。ソーダアイスのカケラが喉の奥をもどかしく刺激して、心地良かった。

なな子は図書館に行くのが日課になっていた。毎日会う他校の子と仲良くなったらしい。「涼しいし水もうめえんだぜ」と無邪気に笑う、なな子の顔を見ていると、俺も嬉しくなった。

ふと、弟のことを思った。俺には弟がいた。病気がちで入院ばかりしていた。家を出てくるときも弟は入院していたので、会えずじまいで離れてしまったが、このまま別れたほうが弟の記憶には残らなくていいのかもしれない。というのは口実で、俺の方が弟の記憶を残したくないのかもしれない。あの家には、弟とその父親と、母親と、三人で暮らすのが理想なんだろう。

俺の家族は、シズクとなな子の三人だ。そうだな、穴が開いて使い物にならないってシズクが嘆いていたから、虫取り網を買うのもいいかもしれない。なな子は花火がしたいって言うていたから、三人で遊びに行くのもいいかもしれない。俺の家族とのことを考えると楽しかった。俺はシズクと花火を買って家に帰った。親父に見つからないように選んだ小さい花火を、シズクが服の下に押し込んで家に入った。

「ただいまあ」

シズクの大きな声が、玄関口から奥まで無駄に届いているはずだが返事はない。いつもなら、なな子がすぐに出迎えてくれるのだが。

部屋に入ると、なな子が泣いていた。押入れの荷物が乱雑に荒らされている。

「なにがあつた？」

「服が……」

「服？」

「ユガにいに……買って、もらった」

なな子が泣きながら説明する。親父があ服をリサイクルショップで金に換えたという。

テーブルの上には酒が二缶だけ。一つは飲み干して、残りの一つを愛おしそうに飲んでいる親父がいた。

「わざわざ行つたのか？ その足で。そんな微々たる酒なんかのため？」

「酒が飲めるなら、俺はこの足を引き摺りながらも、どこまででも行くさ」

俺は、なな子の頭を撫で、押入れを片付ける。いつもは片付けなっていないシズクも、何も言わず整理し始めた。なな子も泣き止み手伝った。

押入れに扉は無く、下の段は布団、上の段が俺たち三人分の収納スペースになっている。それぞれの持ち物を段ボール箱に入れて置いてある。俺は途中参加なので名前は書いてないが、シズクとなな子の箱には名前が書いてある。シズクの箱は、どれも「しずく」の「く」の字が反転している。「しずく」のガラクタ箱が邪魔だが、俺は箱ひとつもあれば事足りた。

どうも様子がおかしい。俺の荷物の隅まで荒らされていることに疑念を抱く。いくら探しても、金なんて出てこねえぞ。こんなところからはな。

貯金があるといつても……このままではこの家は破綻する。だが、

まだ小学生の俺にはどうすることもできないのが実状だった。とにかく勉強をしようと、俺は開いている時間を勉強に当てていた。なな子も俺のそばで静かに勉強をしたり、借りた本を読んだりしていた。シズクは外で遊び呆けて、帰ってくるのが遅いが、少しでも親父と同じ空気を吸いたくないという理由があった。なぜ、逆らわないのか？ と聞いたことがある。

「怖い。前はあの棒でよく叩かれた。俺もなな子も」

あの棒とは杖のことだ。

「小さい頃は優しくかった。父さんと母さんは十年以上も不倫してたんだって。父さんと一緒に住んだことはないけれど、うちにはよくきて遊んでくれた。父さんの仕事がうまく行かなくなっって、生活費が払ってもらえなくなった上に、別な女と遊んでたって、母さんは怒って刺しちゃったの」

「シズクの母親、今は何をしているんだ？」

「わからない。警察に捕まって、俺は施設に預けられたけれど、引き取りにきたのは父さんだった。俺も独りぼっちになっちゃったよ、一緒に暮らそうって言うてくれたんだ。父さんは少しずつ変わってしまった。俺、いつか母さんに会ったら、母さんの足、刺してあげるんだ」

シズクは笑い、整った歯並びを見せた。クリっとした目元や筋の通った鼻、肩まで伸びた茶色がかった髪、愛嬌の良さ、親父には愛おしいものなだろう。

朝飯にラップをし、テーブルの上に置く。一応、親父の分だが、食べるかどうかはわからない。親父はまだ寝ている。俺らは、あと片づけをしながら、今日一日の予定を報告し合う。俺は、「今日は、俺が拭き担当だ」と、シズクが掴んだ布巾を取り、シズクを押しかけた。

シズクは、

「あ、俺は収納担当か」

とつぶやき、茶だんすの扉を開け、

「釣りにでも行く?」

と、今日の予定を思案した。洗浄担当のなな子が、

「夕飯期待してるぞ」

と献立を一案する。

俺は、なな子から洗い終えた茶碗を受け取ると同時に、なな子の予定を聞いた。

「私は図書館に行く。今日まで返さないとならないの」

「じゃあ、夕飯はシズクに任せておけ」

俺は無責任に言いながら、水滴を拭き取った茶碗を収納担当に渡す。

「おう、任せておけ」

シズクは意気揚々に、無責任が盛られた茶碗をたんすに閉まった。

親父はまだ寝ている。起きられたら面倒だ。酒は無いのか?

が一言目で、無いと答えると、しょうゆ持ってこいだの皿持ってこいだの温め直せだの、面倒が重なる。それでも、好きなものだけしか食わず、ほとんどを残す。

物音をあまり立てず速やかに用意し、親父の横を脱出しなければ、俺らが組み立てた調和は狂う一方だ。

なな子はずっと出かけ、俺らは押入れに顔を突っ込み、ボロい釣

竿をあたふたと用意していたら、親父が不調和に起きた。俺は、ため息をつき、

「シズク、先に行つてていいよ」

と言つが返事がない。見ると、手に本を持っていた。

「なな子の忘れ物発見。ユガ、持つて行つてやれよ。面倒片づけたら、俺は釣りに行くから」

図書館、苦手だし。と付け加えた。面倒が、「酒ねえのか」と催促する。俺は頷き、図書館に向かった。

受け付けに、なな子がいた。「取りに戻つてきます」と告げた際に、俺はタイミングよく本を差し出した。

なな子のあとをついて、図書館の中を歩いた。なな子は、本をパラリと捲つただけで、借りる本を決めている。腕の中には、もう四冊の本が重ねられていた。俺はなな子を観察していた。パラリ。棚に戻す。パラリ。借りる。パラリ。パラリ。借りるに決定。パラリと捲る隙間に、決めてとなるなにか隠されているのか、さっぱりわからなかったが、見ていて頼もしいぐらいの潔さを感じる。計七冊の本を借り終えたとき、こちらを見つめる視線を感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7832x/>

屈折ノ蓋（旧タイトル：歪んだ舌）

2012年1月9日06時46分発行